

## 米国の脳卒中による死亡は減少傾向に

これまでの研究で脳卒中による死亡は減少していると報告されているが、人種別にみた脳卒中発症率や長期的傾向についての有効なデータは少ない。そこで本研究では、米国の白色および黒色人種の成人を対象に脳卒中の発症率・死亡率について 1987 年から 2011 年までの傾向を調査した。

対象となったのは、試験開始時に脳卒中のない 14,357 人で、各被験者の心臓血管病の危険因子についての情報も収集した。2011 年まで追跡した結果、脳卒中を発症した 1,051 人（7%）のうち、虚血性脳卒中が 929 例、出血性脳卒中が 140 例であった（18 人の被験者が両方を発症した）。脳卒中の発症率は経時的に減少し、年齢を補正した 10 年ごとの発症率は 0.76 となった。この傾向は 65 歳以上の被験者で明確であった（年齢を補正した 10 年ごとの発症率：0.69）が、64 歳以下でははっきりとはしなかった（年齢を補正した 10 年ごとの発症率：0.97）。性差についてはみられなかった。脳卒中を発症した被験者のうち 2011 年までに 614 人（58%）が死亡した。死亡率は、出血性脳卒中の場合のほうが虚血性脳卒中の場合よりも高かった（68%対 57%）脳卒中後の死亡率は経時的に減少した（危険率：0.8）。この傾向は 64 歳以下の若年者における死亡率の減少（危険率：0.65）によるところが大きい。人種差、性差はみられなかった。

以上の結果から、米国の白色・黒色人種の集団においては、1987 年から 2011 年に至るまで脳卒中の発症率および死亡率は減少していることが示された。また、その減少率に年齢による違いはみられるが、人種や性別による違いはみられないことから、脳卒中の発症と転帰が 2011 年に至るまで改善傾向にあることが示唆された。

出典：Journal of the American Medical Association. 2014; 312(3): 259-268